

平成29年第1回（臨時）高砂市教育委員会 会議録（要旨）

日時

平成29年1月12日午前10時

場所

高砂市役所西庁舎4階会議室

出席者

衣笠教育長、吉田委員、藤井委員、山名委員、神尾委員

出席事務局職員

大西教育部長、木村教育推進室長、瀧野学校教育室長、  
都筑教育推進室教育総務課長、駒井学校教育室学校教育課長

本日の会議に付した事件

協議事項

- 1 豊かな心の育成について

-----  
議 事 協議事項 1 豊かな心の育成について

- 事務局 (協議事項 1 について説明)
- 教育長 道徳教育、体験活動、学校行事、伝統文化に関する、ふるさと「高砂」を愛する心を育てるという教育。このような取組をしながら豊かな心を育てていくということですが、何かご質問とかご意見はありますか。
- 委員 A 兵庫県の道徳副読本は学年によって違うんですか。
- 事務局 小学校は、1・2年、3・4年、5・6年と、中学校は1冊、兵庫県も同じ分け方で、全部で4部構成になっています。
- 委員 B 「親子道徳の日」に取り組むという部分で、親子作文とはどんなものですか。
- 事務局 1つの例ですが、兵庫県の副読本の中から幾つか学校が指定したお話の中から1つを取り上げて、親子で一緒に読んで、話し合っ、感想を書いてもらい、それを学校が集約して、校長先生が学校だより等で紹介していくというような取り組みです。
- 委員 B 最終的に書くのは子どもですか、お母さんですか。
- 事務局 保護者も書かれますし、子どもも書きます。両方が書く欄を設けております。
- 委員 C 高砂市道徳教育推進会議というのがありますが、そこも学校の先生方が中心の構成なんです。これを広く、地域とか学識経験者とかも一緒に取り組めないのかなと思います。一方的に学校寄りの意見が出てしまいそうなので。もう少し幅広い意見を聞けたらと思うんですけどどうですか。
- 事務局 この推進会議には、広く意見を聞くということで、構成メンバーの中には連合PTAから1名入っていただいて会議を構成しておりまして、その方からもご意見を伺っております。
- 委員 C その人数の割合が、ほとんど学校の先生方中心になってしまっているのもう少し幅広い意見をいただいたほうがもうちょっとよかったのではないかな。
- 教育長 福祉教育とか人権教育とか、学力の面も含めて、もう少し後になりますが、学校評価をするときに、評議員さんとか自治会の方とかいろんなメンバーから意見を聞くことはできますが、道徳教育だけに特化したこの会議の中では、今のところ連合PTAの方お1人という形になっています。
- あと、各学校で、道徳の授業を行う参観日をしたときにアンケートでご意見を聞いています。オープンスクールのときのアンケートとか、学校評価のときに各自治会の団体の方から、道徳教育についてのご意見をいただいたり、質問を受けたりする機会は何回かあります。
- 委員 C 具体的には、推進会議は何回ぐらい開いていますか。
- 事務局 今年度は2回、昨年度は3回開いていました。
- 委員 A 道徳教育は年に何時間ぐらい授業をやっているんですか。

- 事務局 年間35時間、教育課程の中で、位置づけられています。
- 委員A 今度、教科化したときには、年間どれぐらいになるんですか。
- 事務局 年間授業時数は変わりません。35時間です。
- 教育長 道徳教育というのは、その授業だけではなくていろんな場面でやっていますので、全部の教育課程の中で進めるということです。
- 委員A 道徳教育を教科化して、評価をするということは、絶対義務なのか。
- 事務局 必ず評価はするというので、通知表、それから、もとになる指導要録のほうにもそれを記載します。
- 委員A その評価は担任の先生がするのか。
- 事務局 はい、担任が行います。
- 委員A 道徳教育の中で、各教科と違うところが、担任の先生がどれだけ道徳教育に関して公平な判断ができるのか、保護者はみんな不安に思っています。「誰がこんなことを言っているんだ。うちの子どもにこういう評価をつけるのは何だ」という反論が絶対出てくる。
- 道徳教育の中で、教科化して、トライやる・ウィークなど、いろんな体験学習を通じてトータルで、1つの評価としてそこへ集約することになるから、すごく難しく、評価しないでいいのだったら評価しない状況があってもいいのかなと思う。
- 委員D 最終的にはその教師個人個人の力量が問われますね。でも、個人も努力しないといけないし、組織としてそういう教師も育てていかなければいけないというところはもちろんありますよね。
- 事務局 文部科学省の考え方としては、従来の読む道徳から「考え、議論する道徳」への転換を図る。そして、道徳に関する評価の特徴としては、児童・生徒の成長を積極的に認めて励ますのが目的であるというところ。また、授業ごとではなくて、学期・年間を通じて一定のまとまりで評価をしていき、他の児童・生徒とは比較しないしてほしいというところですよ。
- 委員B 道徳というと、すごく幅広くて、人権の部分は、世界中、大体同じ価値観を持ち始めていると思うが、それ以外に、地域的、世代間の価値観とか、政治が違えばまた違ったりとか、いろんなものを含めての道徳なので、いい悪いというのはどこにも判断の基準はないと思う。
- だから、これを評価するには、主観を交えないために大変な研修と努力が必要だと思う。公平に評価できる基準みたいなものも考えていくべきだと思う。結局、1人の先生が評価をすると、その先生の持っている道徳観と子どもの道徳観についての評価になってしまうと思うので、慎重にしていきたい。
- 委員A 今の大人から考えて、子どもに対してどんな人間であってほしいかという1つの希望から、大人に都合のいいような形のモラルになってほしいという道徳観念を植えつけていく可能性があるところが道徳教育の難しいところだ。

- 事務局 中教審の今回の指導要領の改定とか教科化に至る中教審の専門部会の中で、評価に対する賛否が議論されています。子どもを評価するために、大変な努力と研修を要するという議論。教育委員会としても、先生方に努力して研修してもらって、子どもたちを認め励ます評価になるように、偏りのないように、多様な目で、多様な方法で評価するようにも言われていますので、ローテーション授業と言って、学期に1回ぐらいは同じ学年の先生がほかのクラスに入って、授業をしながら子どもの成長とか子どもの考えを見取っていくということも、今後、高砂市でも研修の中で取り入れていきたいと考えています。
- 委員D 高砂市の実践内容1、2、3、4の中で個人的に思うこととして、実践内容の1「自主的・実践的な態度の育成」は、まだこれから大いに伸ばせるかなと思います。そこに「自己有用感」という言葉、「自尊感情」とかいろんな言葉で言われるが、日本は他国に比べて圧倒的に低いという調査結果があり、自分を大事にできないと人も大事にできないから、豊かな心ということからいうと、致命的で、非常に大きな問題だなと思う。
- 自己肯定感とか有用感を尊重する、大事にする心を育てるには、学級活動とか授業改革、自分で1人1役とか。簡単に言えば、「ありがとう」と言ってもらえる機会を増やすのが一番わかりやすい、手っ取り早いと思うが、そういう仕掛けや工夫を、学校と、家庭学習でどんどんアピールしていくのがすごく大事だと思う。
- 委員A その子の存在価値、必要とされている人だということ。その必要性があって、一つ一つのこと、動作に関して、褒めて感謝を示してあげる。それをしてくれることに対して、「今度、また次、こうしてほしいね」という形のことを伝えるし、自分が家庭内、学校の中にせよ、存在感がある、クラスの一員であるということを実感させなければならない。
- 委員C そういう家庭の教育まで、どこまで入るかというのが大きいポイントだと思う。よく言われるのは、1人でいたら孤独ではないが、大人数の中で1人にされるのは、お年寄りなんかは非常に困ってしまう。自分1人だけでもちゃんと生活できるが、同じ家に家族とともにいながら誰も声をかけてくれないと、家族はいるが1人だけになる。それが非常に心に痛いと言っておられる。そのように、家庭教育までどこまで行政が入っていけるのかが大きなポイントになってくると思う。そういう温かく迎え入れてくれる、学校、友達関係、先生、の育成というのは非常に大きいでしょうね。
- 委員B 世界との自尊感情の比較は、日本人の美德で、慎ましくあれとかそういうものがあるので、その数字だけではちょっと難しいと思う。ある程度、美德的なことと、自分が一歩出るところのバランスをきちんとこれから教えていかないと、グローバルな世界で生き残れないなというのがありますから、そこ

のところをきちんと教育するのは必要だと思う。

それとは別に、家庭で、親は子どもが大事なのははっきりしているが、言葉に出さないと伝わらないことがあって、子育てで精いっぱいときはあまり気づかないので、何かちょっと気づかせてあげられる機会があればと。一生懸命なときは、そういう気持ちの余裕が多分ないと思う。

一番大事なのは小さいときで、心の余裕を持ってこうしたら子どもがすごく変わるというアイデアを、先生方から発信していただけたらと思う

○教育長 外国の方と、日本の文化と外国の美德、日本の美德、謙虚の美德と言われることも含めて、フロリダからの風という教材があって、それを読みながら、考え、議論して、日本と外国との文化の違いみたいなものも考えさせるようなものもあればと。そんな中で、先生もともに考えていくことが大事だと思います。

あと、伝統文化とかに、高砂のことを愛する心を育てる部分では、何かご意見はございますか。

○委員A 高砂の町なかは、ごみが多いと思う。小さいときには、子どもは、床に落ちていたごみとか、ちょっとつまむんですよ。拾って、「それをポイして」とか言ったらゴミ箱に捨ててくれる。そういう形で、もともとから、何か落ちていけばみんな拾おうという感覚ができていると思う。

それが、社会の中に出たときには、知らんぷりするし、小さい善行というものをしなくなる。そういうのをさりげなくできるような状況をつくっていけば、やはり高砂の文化が育つし、文化財保護でも、いろんな高砂の歴史ロードみたいなのをつくったって、結局、草ぼうぼうで何もわからないような状況になっても、みんな無視していく。

ただし、強制的になると育たないから、さりげなく自然発生的になるためにはどうしたらいいのかなと思う。

○委員D 強制的なもので、地域のクリーン作戦をやっている小中学校があります。それをやると、拾うまではいかないけれども、捨てにくくはなったりしているんです。地域の方がそういう活動を見してくれるし。

○教育長 視点が文化財ということで、根本的な、町をきれいにするということの発想から、こういったところにつながるというのは大事なことだと思います。

○委員C ここ400年、あるいは、江戸時代から非常に高砂は発達してきた。それから、伝統文化。こういう、ほかの市にないようなもの、高砂独自のものがあるから、これを早く整備して、地域の住民に誇りを持たせていくことが高砂はまだ非常におくれている。やっとな図書館、申義堂も復活して、一歩進んだが、転入してきた方がかなりいらっしゃるから、いかに高砂に愛着を持ってもらうかが大きな1つの課題だと思う。高砂市内にいろいろあるものを生徒・児童に実物を見せたり、そこの人に話を聞くとか、そういう活用をしたら、も

うちょっと愛着が出るのではないか。

○委員A 施設の充実との文化財の啓蒙に関しては、すごく高砂はおくれているから、どこに何があるかというきちんとした情報が得られない。連なっている部分、歴史ロードマップをつくって、スタンプラリーとかができるような形にしてもいいのではないか。

○委員B 古いものを大切するという、これも1つの道德観だと思うが、それが、ちょっと欠落してきている。民話などに対して、「古い話はもういいから」というお母さんがいるということを知っている。保護者がそういう認識を持っているなら、かえってそういうものに対する意識を子供に持ってもらうのは先生の仕事だと思う。

○教育長 いろいろご意見いただく中で、教育委員会だけでなく、他のいろんな部署とも連携していく必要のあるものもたくさんあったので、機会があれば、総合教育会議の中でもご意見をいただけたらと思います。

○委員C ふるさと文化財は登録ということで長くやっているが、このごろあんまり出てこないの、積極的な登録勧奨をお願いしたい。

○教育長 よろしいでしょうか。

他にご意見がなければ本日の教育委員会をこれで閉会といたします。

---

平成29年1月12日 午前11時53分 教育長会議の閉会を宣告

---